

日本フランス語フランス文学会

2011 年度春季大会

2011 年 5 月 28 日 (土)・29 日 (日)

会 場：一橋大学国立キャンパス 〒186-8601 東京都国立市中 2-1

大会本部：一橋大学言語社会研究科共同研究室

Fax：042-580-9039 Mail：coucoufrench@gmail.com

当日連絡先：042-580-8800

■お車でのご来場はご遠慮ください。■お問い合わせは FAX またはメールでお願いいたします。

■大会費等は同封の振込用紙にて、5月10日(火)までにお振込みください。

■大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局までご請求ください。

■委員会・役員会につきましては、学会事務局よりご連絡いたします。

大会費：1,000 円

昼 食：両日とも会場周辺の飲食店、コンビニエンスストア等が営業しておりますので、お弁当の用意はございません。

■ 一般控室：本館2階21番教室

■ 賛助会員展示会場：本館2階20番教室

第1日 5月28日(土)

受 付 11:30-17:00 本館正面玄関ホール

開会式 14:30-14:40 本館3階31番教室

司会 一橋大学 佐野泰雄
開会の辞 一橋大学 中野知律
開催校代表挨拶 一橋大学言語社会研究科長 糟谷啓介
会長挨拶 京都大学 吉川一義

研究発表会 本館2階、3階

第1部 14:50-16:20

第2部 16:30-18:00

懇親会 18:30-20:30

会場：一橋大学 東キャンパス マーキュリータワー7階
マーキュリーホール

Tel: 042-580-8800 (当日のみ)

会費：8,000 円 (学生・研究発表者 5,000 円)

第2日 5月29日(日)

受 付 9:00-14:00 本館正面玄関ホール

テーブル・ラウンド 9:40-11:40 本館3階31番教室

「今、フランス語フランス文学とは」

司会 東京大学 月村辰雄
京都大学 吉川一義
大手前大学 柏木隆雄
放送大学 宮下志朗
慶應義塾大学 古石篤子

ワークショップ I - III 12:40-14:10

I 本館2階24番教室

II 本館2階28番教室

III 本館3階38番教室

総 会 14:20-16:00 本館3階31番教室

議長 早稲田大学 川瀬武夫

閉会式 16:00-16:10 本館3階31番教室

会長挨拶 京都大学 吉川一義
閉会の辞 一橋大学 佐々木滋子

日本フランス語フランス文学会 2011 年度春季大会
研究発表会 プログラム 5月28日(土)

	第1部 (14:50 - 16:20)	第2部 (16:30 - 18:00)
A 会場 本館2階 28 番教室	語学・16世紀	18世紀
	<p>・司会：杉山利恵子（明治大学）</p> <p>■1. 対話における主体間調整 — 共発話者の意向を先取りする談話標識 <i>si tu veux / si vous voulez</i> の考察より 安齋有紀（青山学院大学非常勤講師）</p> <p>■2. 日本人学習者におけるフランス語疑問発話におけるイントネーション特徴 — 音響的観点からの分析 安藤博文（名古屋外国語大学大学院博士課程）</p> <p>・司会：相田淑子（中央大学）</p> <p>■3. ボンテュス・ド・ティヤール(1521-1605)による知の探求 小池美穂（慶應義塾大学大学院博士課程）</p>	<p>・司会：増田真（京都大学）</p> <p>■1. 魅惑する地方性 — ルソー『新エロイズ』における小説の地政学 斎藤山人（パリ第七大学博士課程）</p> <p>■2. 『新エロイズ』の新旧ロクス・アモエヌス 白須真志（上智大学非常勤講師）</p>
B 会場 本館2階 22 番教室	19世紀1	19世紀3
	<p>・司会：澤田肇（上智大学）</p> <p>■1. ジョゼフ・ド・メーストルにおける自然法・野生性・ヨーロッパ 片岡大右（東京大学大学院研究員）</p> <p>■2. ユゴー『マリオン・ド・ロルム』における国王の表象 — ルイ13世と「欺かれた人々の日」 黒川彩子（大阪大学大学院博士課程）</p> <p>■3. 『ゴリオ爺さん』における「歌劇」の表象と役割 山崎宏（同志社大学非常勤講師）</p>	<p>・司会：松澤和宏（名古屋大学）</p> <p>■1. 『感情教育』における光と陰 木内堯（東京大学大学院博士課程）</p> <p>■2. La vulgarisation scientifique dans la seconde moitié du dix-neuvième siècle et le champ littéraire — les formes caractéristiques de la transmission du savoir dans les romans de vulgarisation scientifique GARRABET, Christophe（関西日仏学院非常勤講師）</p> <p>■3. ゴラ『愛のページ』におけるパリの風景描写と登場人物の造形 野田農（京都大学大学院博士課程）</p>
C 会場 本館2階 23 番教室	19世紀2	19世紀4
	<p>・司会：吉田典子（神戸大学）</p> <p>■1. 化粧の誘惑 — フロベール、ゾラ、ゴンクール<small>の</small>小説における女性の化粧 高井奈緒（パリ西・ナンテール大学博士課程修了）</p> <p>■2. Qui est «T. OURAKAMI»? — Étude sur un collaborateur d'Edmond de Goncourt 山本武男（慶應義塾大学専任講師）</p> <p>・司会：遠藤文彦（福岡大学）</p> <p>■3. Quelques aspects éclairants d'une lecture théâtrale de l'écriture Orientaliste de Pierre Loti TURBERFIELD, Peter（亜細亜大学准教授）</p>	<p>・司会：中畑寛之（神戸大学）</p> <p>■1. 『僧服の下の心』 — 『地獄の季節』のプロトタイプについて 深井陽介（山形大学非常勤講師）</p> <p>■2. マラルメの詩学における空間の運動について 坂口周輔（東京大学大学院博士課程）</p>
D 会場 本館3階 38 番教室	19世紀・20世紀	20世紀3
	<p>・司会：和田恵里（青山学院大学）</p> <p>■1. アナトール・フランスから見る読者 澁谷与文（学習院大学大学院博士課程）</p> <p>■2. ブルーストにおける「文学的信念」 鈴木隆美（日本学術振興会特別研究員）</p> <p>■3. ブルーストとラスキン — 詩的風景の創出 津森圭一（京都大学研究員）</p>	<p>・司会：高橋信良（千葉大学）</p> <p>■1. ボール・クロードル（1868-1955）による能の翻案 — 『智慧の饗宴』（1934）について 西野絢子（慶應義塾大学大学院博士課程）</p> <p>■2. La Poésie dramatique face à la catastrophe — Étude sur le théâtre français pendant la Grande Guerre 小田中章浩（大阪市立大学教授）</p> <p>■3. サミュエル・ベケットの中期散文作品における言説の「演劇性」について 藤原曜（関西学院大学非常勤講師）</p>
E 会場 本館3階 34 番教室	20世紀1	20世紀4
	<p>・司会：石川美子（明治学院大学）</p> <p>■1. 「自伝フィクション」の視点から見たドリュ・ラ・ロシェル『若いヨーロッパ人』 — 1927年における「私」の位相 吉澤英樹（成城大学非常勤講師）</p> <p>■2. 「歴史」の喧騒、「物語」の静寂 — フランソワ・モーリヤックにおける「自伝空間」から「伝記空間」への軌跡 中村秀俊（一橋大学大学院博士課程）</p> <p>・司会：渡辺芳敬（早稲田大学）</p> <p>■3. フィクションとしてのデュラス『愛人』の成立 — IMEC 草稿群に見る『愛人』成立過程 芦川智一（日本大学非常勤講師）</p>	<p>・司会：合田正人（明治大学）</p> <p>■1. 「虚無か実在か」を超えて — 鈴木大拙を読むシモヌ・ヴェイユ 鈴木順子（明治学院大学非常勤講師）</p> <p>■2. 共通感覚の淵源へ — シモヌ・ヴェイユ『前キリスト教的直観』をめぐる 今村純子（慶應義塾大学非常勤講師）</p> <p>■3. レヴィナスにおけるブランシュヴィク受容 馬場智一（日本学術振興会特別研究員）</p>
F 会場 本館3階 32 番教室	20世紀2	20世紀5
	<p>・司会：山田広昭（東京大学）</p> <p>■1. モーリス・ブランショにおける「二つの夜」について 岡崎敏（名古屋外国語大学非常勤講師）</p> <p>■2. 形式と意味について — ジャック・デリダのヴァレリー論における「純粹自我」をめぐる 山岡利矢子（東京大学大学院博士課程）</p> <p>■3. シーニュの国土をめぐる — ロラン・バルト『記号の帝国』と〈空〉の思想 小嶋洋介（中央大学非常勤講師）</p>	<p>・司会：岩野卓司（明治大学）</p> <p>■1. 「起こりうる戦争」を待つ — 「戦争」の主題をめぐるバタイユの『空の青』試論 大池惣太郎（東京大学大学院博士課程）</p> <p>■2. 民主主義の危機と「超越性-頭部」の問題 — 1930年代のジョルジュ・バタイユ 安川奈緒（京都大学大学院博士課程）</p> <p>・司会：渡辺芳敬（早稲田大学）</p> <p>■3. せめぎ合う欲望と、植民地カピリーの社会 — ムールード・フェラウン『上り坂』について 茨木博史（四日市大学非常勤講師）</p>

テーブル・ラウンド 29日(日) 9:40 - 11:40
本館3階31番教室

今、フランス語フランス文学とは

吉川一義(京都大学)、柏木隆雄(大手前大学)、宮下志朗(放送大学)、古石篤子(慶應義塾大学)、月村辰雄(東京大学、司会)

この度の東日本大震災は、今後、日本におけるフランス語フランス文学の教育・研究にもなんらかの影響を及ぼすものと思われる。すでに大学教育におけるフランス語フランス文学の退潮が指摘されて久しいが、新しい事態を迎えて私たち教員はどのように教育に当たるべきなのか? また研究にどのような意義を見出すべきなのか? こうした問題について、従来の議論を踏まえた上であらためて検討を加えてみたい。

ワークショップ 29日(日) 12:40 - 14:10

I 文学におけるセクシュアリテ — 文学と欲望の問題 —
本館2階24番教室

高岡尚子(奈良女子大学)、吉川佳英子(京都造形芸術大学、コーディネーター)、関修(明治大学)、合田正人(明治大学)、若森栄樹(独協大学、司会)

フロイト以来の精神分析の成果と、フーコーの『性の歴史』による問題提起をふまえるなら、今日の文学研究においてはセクシュアリテのテーマは避けることができない。今ワークショップでは家族や同性愛、言語の視座から19世紀-20世紀の文学におけるセクシュアリテを考察していく。具体的な発表内容は以下の通り。

- ・「母親の身体」のセクシュアリテ(高岡)

ブルジョワの倫理観の正当化とその言説化が繰り返された19世紀前半における女性のセクシュアリテへの関心と認識はどのようなものであったかを中心に考える。具体的には、ジョルジュ・サンドの『ジャック』を取り上げ、ジェンダーに関する問題点が集中して顕在化する「場」としての、「母親の身体」に注目したい。

- ・「性」や「種」の境界を越える可能性をめぐる一ブルーストとコレット(吉川)

性の別をそれと意識せず越えてしまう登場人物像を示すブルーストに対して、同時代の作家コレットは生物の種の違いをも越え得る人物を描き出す。知性の領域をはずれ感性に基づくことで19世紀からのリアリズムを巧みにかわすコレットへの、ブルーストの晩年における共感を、1922年のブルーストの未発表の手紙を参照しながら示す積もりである。

- ・ゲイ文学=エイズ文学の境界に関する一考察(関)

現代フランス「ゲイ」文学におけるエルヴェ・ギベールとシリル・コラルを取り上げ、エイズ禍の前後で作品にどのような違いが生じているかを考察するとともに、1996年に始まった抗ウイルス薬の多剤療法によって慢性病化の経過を辿るエイズのもとでのルノー・カミュやギエール・オッカングムの作風にも言及したい。

- ・言語とセクシュアリテ——エレヌ・シクスのジョイス論を起点として(合田)

エレヌ・シクスの博士論文『ジェイムズ・ジョイスの流浪また

は置換の技法』(1968)を起点とし、後の彼女の著述活動にジョイス論が及ぼした影響について考察する。彼女のジョイスの分析は、彼女の「位置」とも密接に結びついているようだ。ここでは、ラカン、サリヴァンの精神分析的見地にも訴えながら考えたい。

II Des devenirs-végétaux en littérature : aperçus de la flore contemporaine
本館2階28番教室

Agnès Disson(大阪大学)、Jacques Lévy(明治学院大学)、François Bizet(早稲田大学、司会)

Ceci n'est pas une énième table ronde sur la rhétorique, et sur sa fleur, qui fut longtemps consubstantielle au discours littéraire. Baudelaire, Rimbaud, Lautréamont, et plus près de nous Ponge et Genet, sont passés par là, et il est possible qu'après eux, l'herbe n'ait quelque mal à repousser.

Nous voudrions plutôt essayer de tirer les leçons des savoirs nouveaux qui parcourent depuis quelques décennies la biologie végétale, notamment dans les livres de Francis Hallé, et du dialogue qu'ils ont commencé de nouer avec d'autres disciplines (la philosophie - Thierry Marin - et la psychologie - Raphaël Bessis) pour définir ce qu'on pourrait appeler, dans le sillage pratiqué par la pensée de Deleuze, un *devenir-plante*, et en repérer dans les textes littéraires contemporains des manifestations originales, à travers les questions de la sexualité, de la répétition, de la nomination.

Les participants exposeront chacun leurs réflexions, et ce tour de table sera suivi d'une discussion avec la salle. Agnès DISSON, spécialiste de poésie contemporaine, présentera des œuvres de trois auteurs: Suzanne Doppelt, Sekiguchi Ryoko, et Justine Landau. Jacques LÉVY, parlera d'un roman de Abe Kazushige: *Pistols*, 2010. François BIZET, après une introduction où il esquissera les enjeux théoriques de ce workshop, évoquera les fictions post-exotiques et proliférantes d'Antoine Volodine, et modèrera la discussion.

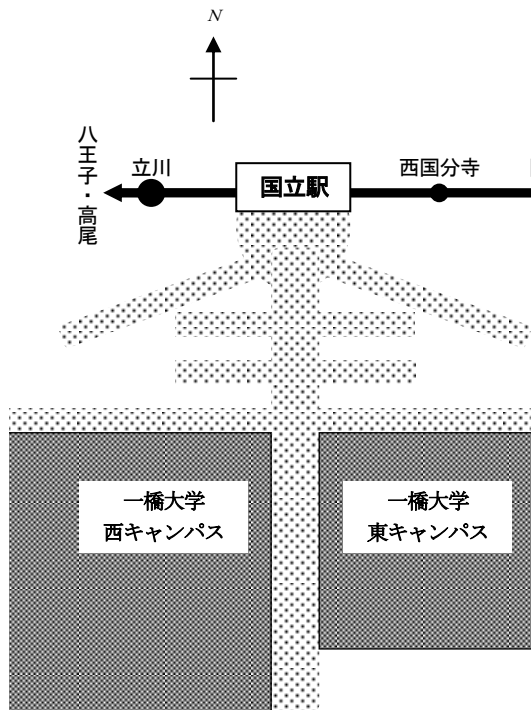
III アルジェリア戦争と複数の文学 (La guerre d'Algérie et les littératures)
本館3階38番教室

カトリーヌ・ブラン(パリ第3大学)、石川清子(静岡文化芸術大学)、鶴飼哲(一橋大学、司会)

アルジェリア戦争を問い返す作業は狭義のフランス文学の内部でのみなされてきたわけではない。フランス語表現のアルジェリア文学は言うに及ばず、アルジェリアにおけるアラビア語およびベルベル(アマジグ)語による文学作品も、この戦争の記憶の普遍的象徴化にとって不可欠の文献である。

アルジェリア戦争の文学的記憶を研究する国際プロジェクトに取り組むカトリーヌ・ブラン Catherine Brun、アシア・ジュバールの作品を通して民族解放闘争の渦中の女性たちの状況を問う石川清子、ジャン・ジュネの戯曲『屏風』(Les Paravents)を中心に脱植民地化のアポリアを考察する鶴飼哲が参加するこのワークショップでは、戦争の暴力に回答する文学言説の現代性の多様な展開が検討される。

交通案内



- ・国立駅（南口）より大会会場まで、徒歩にて約15分です。
- ・土・日のJR中央線 東京－国立間、新宿－国立間の所要時間は、快速利用でそれぞれ50分弱、40分弱となります。
- ・国立駅に停車するのは快速、各停のみで、特別快速は停車しません。ご注意ください。

大学構内図

